

# ナンテンの花と実



復刊85号

## 妙たえの光ひかり

ナンテンは赤い実が正月のお飾りや活け花に使われ、縁起のいい植物とされている。その名は、難を転じて福をなすというのが由来だとある。

写真の花と実は玄關脇にある同じ木で、花は6月に、実は12月に撮影したもの。赤い実は咳止めに効くそうだが、冬の貴重な鳥のエサでもある。また青い葉は殺菌効果があり、赤飯や魚料理に添えられる。

大きく成長する木ではない。ところがフーテンの寅さんで有名な東京柴又の帝釈天・題経寺には、ナンテンの床柱があった。太い部分で周囲28センチ、直径が9センチもあって、樹齢千五百年だそう。

縁起のいい紅(実)白(花)の表紙で一足早い正月気分を迎え、来年が難を転ずる良い年でありますように。

南天の実になる花と思われず

正岡子規

## 行事案内



### 合同法事

今年に年回忌(法事)が当たっていたけれど、都合でできなかったという方のために、合同の年回忌法要を営みます。檀信徒・安穩会員どなたでも。

- 12月22日(日)午後1時—受付 2時—法要 3時—銘々で墓参り
- 費用 ●塔婆1霊位2千円 ●お供物共通経費2千円 ●お布施
- 持物 ●位牌 ●墓参用の花、ロウソク、線香 ●平服でどうぞ
- 申込 12月18日までに電話でもかまいませんが、なるべくFAXやハガキ等で。

### お札配り

12月中旬に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。県外等でお札を希望される方はお送りします。

### 除夜の鐘・お焚き上げ

除夜の鐘は31日午後10時30分から、大玄關受付で整理券を配布し、本堂で除夜法要があります。どなたでも一人ずつ必ず撞いていただけます。温かい甘酒、コンニャクの用意もあり、若い人たちで賑わいます。

11時半ころから古いお札、しめ縄等の`お焚き上げ、をします。当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。



### 年始参り

1月1日と2日の午前9時～午後4時。最近のご夫婦や家族そろってという方が増えています。お気軽にお出かけください。玄關で受付されたあと、住職が大広間でお待ちしています。



ほしまつ きがんふだ

### 『星祭り』祈願札

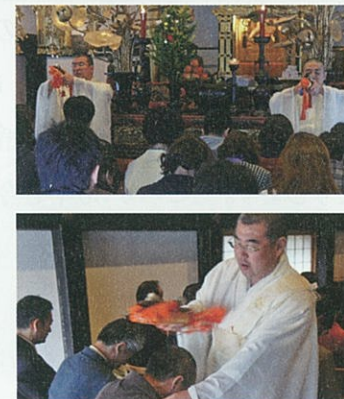
個人ごとにその年の星回りがあって、元旦の朝に本堂で希望者の『星祭り』を行い1年の安泰を祈願します。家族ごとに1枚のお札にして1軒2千円でお届けします。

新規お申し込みの方は、家族全員の氏名、男女別、生年月日を書いて12月20日までにお知らせ下さい。継続の方は申込不要です。

やくよ きがんさい

### 厄除け祈願祭

厄年の祈願祭は、2月1日(土)・2日(日)いずれも午前10時。厄年の一覧表を付けた詳細ご案内は別紙でご確認ください。



### 信行会とボランテラ

1、2月の「月例信行会」とボランテラはお休み。次回は3月2日(日)「信行会」、15日(土)ボランテラ(奉仕作業)です。



あ と が き



3月の「開創700年記念身延山大法要」に始まったお寺の1年も、終わろうとしています。この秋、お寺は様々な行事で賑わいました。ご前様は風邪をひいたりしながらも、元気に走り回っておられます。新たな100年に向けて、いろいろな計画も進行中です。今号では、その一部をご紹介します。妙光寺は、来年701年目を迎えます。今後とも『妙の光』をご愛読ください。(新倉理恵子)

# 140年前のご先祖 小川英爾



## 過疎の村から

妙光寺がある角田浜の隣村・五ヶ浜は、妙光寺とのゆかりも深い歴史のある小さな村です。しかし目の前の海とわずかな畑しかない厳しい土地で、漁業が衰退してからは出稼ぎが主な収入源だったので、過疎化が今も進んでいます。

出稼ぎは明治の後半から始まって、男は大工や左官などの職人として会津や関東へ行き、漁師として北海道から樺太まで出かけた。女は主に『毒消し』という伝統薬の売り子として、会津や関東各地を行商して歩きました。そして出稼ぎ先で成功を納めても、うまくいかなかったり、戻って来るのはわずかな人だけでした。故郷には空家と、たまに親戚がお参りしてくれる先祖の墓だけが残されたのです。

時代がよくなつて、墓を移住先に移した方や、五ヶ浜から妙光寺の墓地に改めて立て直した方もあり、いずれもお寺との縁はつながっています。しかし一方で、連絡が途絶えて久しい方も多く、時々「先祖を知りたい」と県外から子孫の方が訪ねて来ることもあります。

## 墓地の整備

妙光寺の山側の墓地の一角は、低地で春

先や梅雨時には水が溜まります。ここを整備して、以前から要望の多い檀徒向けの安

穩廟を作ろうと計画中です。跡継ぎのいない檀徒さんの墓をここに集めて、将来は永代供養にすれば安心できるという趣旨です。

この場所に現在残っているのは、既に跡継ぎが絶えて放置された数基の墓だけです。これらを合同供養することを、それぞれ遠縁の親族からご承諾いただきました。残る「明治5年五ヶ浜」と書かれた1軒分3基の墓だけ連絡が取れていません。以前、親戚という方から、直系の子孫が北海道にいて昔は旅館を営んでいたと、住所と電話番号を教えてくださいました。ところが、その親戚の方も先頃亡くなり、いよいよ北海道に電話をすることにしました。転居しているかもしれないし、「そんな昔のことは知らない」と言われても無理からぬ話です。電話の返答は「この番号は現在使われていません」でした。

## 140年の空白

町役場ならと思いかけ直しました。事情を説明すると小さな町だけに旅館名だけではすぐわかり、電話番号も教えてくれました。電話に出られたご主人とおぼしき男性は、お客さんの対応で忙しいそうなお配でしたが、真剣に話を聞いてくれました。

ご主人曰く「その屋号は我が家の先祖に間違いありません。先祖の地は新潟県の五ヶ浜と聞いていました。しかし私も若いころはそんな話に興味も関心も無く、それ以外のことは何も聞いていなかったのです。親が亡くなりこの年齢になってから気にかかって、先祖を分骨した墓があると聞いた身延山の宿坊「北の坊」を2度尋ねました。「北の坊のご住職が不在でわからなかったのですが、その後ここで檀家になっている日蓮宗のお寺が、分骨した墓を見つけてきてくれました。」

新潟には一度佐渡にお参りに行っただけです。先祖のそのまた先祖が島流しの日蓮聖人を警護した人で、何かありがたい印鑑をいただいたと、親から聞いた覚えがあったものですから。我が家にも古い書付が残っています。昔の字で読めないのです。

突然のお話で戸惑っていますが、妙光寺さんに先祖の墓があるのです。客商売ですぐに時間を作るのは難しいけれど、何とでもお伺いしたいです。

北海道のホオホーツク海沿いの小さな町、そこに住む子孫の方と繋がりました。おそらく先祖は漁師として北海道に行かれたのでしょう。以来140年の空白の期間にどんな歴史があったのか。子孫の感慨を想像しながら、寺の役割の一端を改めて知ったと思います。



受け継ぎ講員を勤める。

とにかく驚くのが、この歳で畑仕事の現役であるということだ。朝食後に乳母車を押して畑まで行き農作業。昼食に自宅に戻り、午後からまた畑に向かい夕方まで農作業。片道1キロの畑まで、毎日二往復するのである。時には弁当持ちで行くときもある。「じっとしてられね性分なんだ」と笑う。収穫した作物を人々に分けるのもまた楽しみの一つだと言う。

現在、孫が9人、曾孫が3人いる。それぞれ成長を見守るのも、また楽しみだ。

この歳まで病気で入院したことがない。病院のベッドで寝たのは、4人の子が生まれたお産の時だけである。知り合いや、友だちが皆亡くなり、自分ひとりになってしまったことは、やはり寂しい。しかし今こうして自分の足で歩いてお寺参りが出来、仏様、ご先祖様に手を合わせる事が出来るのが、何よりも幸せなことだと思う。これからも生きる糧として信仰心を持ち続けたい、と意気込みを語ってくれた。お題目の団扇太鼓の叩きっぷりは、まだまだ力強い。(鎌田 記)

巻の與市さん(屋号)の婆ちゃんという、誰もがこの笑顔思い浮かべる。むつさんは大正10年、巻七区で農業を営む西村家に、3人兄妹の長女として生まれた。幼いころより農作業を手伝い、小学校を終えて20歳まで実家で過ごした。

終戦をむかえて無事に帰ってきた夫、小林与志英さんと、叔母さんの紹介で結婚した。当時のことゆえ、文字通り身ひとつで嫁に来たという。嫁いだ小林家も専業農家で、義父に付いて一生懸命働いた。幼いころから手掛けた農作業はお手のものだった。しかし、当時小林家には、戦争の疎開者たちが8人も住んでいた。食べ物の少ない時代に疎開者と家族、計16人もの食事を毎日作った。早朝からワラで飯を炊く生活が1年余り続いた。それが一番苦勞した、と当時を語る。

昨年他界した夫、与志英さんが、長年妙光寺世話人として、様々な問題を解決し、お寺の整備に貢献してきたのも、この人の支えあつてのことである。その世話人はいま、長男の与志隆さんが引き継いでいる。十数年前には、三男の忍さんを交通事故で亡くした。いまでも月命日には、自宅の仏壇に欠かさずお参りをし、おこわを炊いてお供えしている。

信仰心の厚い小林家の中心として、朝夕の読経の勤めは今も怠らない。義母が亡くなってからは、巻講中の講員として、月に1回行われるお経会を40年の間勤めた。今は嫁の光枝さんがタスキを

# 92歳の現役

新潟市巻甲

小林むつさん(92歳)

# 開創七百年記念

## インタビュー

### 境内をデザインする

## 設計士に聞く

# 積み重ねた時間を未来につなぐ寺を

妙光寺を訪れた人は、誰もがそのすがすがしい伽藍と境内に感動します。老朽化がすすんでいたお寺を、現在の形にするために尽力されたのは、建築の茶谷正洋先生と造園の野沢清先生でした。

茶谷先生は、東京工業大学名誉教授で、日本の建築設計に大きな足跡を残した方です。まだ二十代だった御前様が昭和50年にツテを頼って客殿の設計を依頼し、その後本堂の設計にも携わっていただきました。

野沢先生は、戦後日本を代表する造園家（環境設計をする人）です。数年に一度は床下浸水する妙光寺の状況に心を傷められ、水路づくりにも協力していただき、その後安穩廟の設計をされました。

お二人とも鬼籍に入られて、野沢先生は今、安穩廟に眠っておられます。現在、妙光寺の様々な工事に携わっているのは、お二人の弟子にあたる設計士さんたちです。

Q 皆さんが妙光寺の仕事をされたきっかけを、教えてください。

中澤 東京工業大学の茶谷研究室に勤めていた30代の時に、南極観測隊に行つたんです。昭和基地にパラボランテナを建てる仕事でした。研究室に帰ってきたら、妙光寺客殿の設計が始まっていた。数人でやってみただけで、どうも住職がイマイチだと言っているらしい。私の方は帰ったばかりで南極ボケ気味だし、担当している仕事もない。そこで茶谷先生と暇だった私が、客殿の仕事をすることになりました。

その頃は、小川住職も二十代の前半です。妙光寺はお化けが出るかなというくらい古いお寺で、ちょっとした荒れ寺でした。図面を持ってお寺に来て、役員の皆さんに4時間説明しました。鉄骨で組むと言ったら驚かれました。でも昔の建物を保存して全体を覆う形にするって説明したら納得してもらえました。それでも上棟式の時は、鉄の骨組みだけですから「車庫かと思った」と言われましたね。

松本 私は、20年前に野沢先生の事務所に入りました。そうしたら、時々新潟のお坊さんが日本酒を持って来るんです。それが小川住職でした。野沢先生が最初の安穩廟を作った後で、茶谷先生の客殿は「新建築」という業界

では有名な雑誌に取り上げられていました。「こんな田舎の寺に、こんなかわいい、すごいものがあるのか」と、私たちには本当に憧れでした。それで、野沢先生の仕事を見る勉強会などもありまして、妙光寺に来るようになったんです。

飯島 20年前、私がいた設計事務所に中澤さんが入ってきたのですが、私から見たら中澤さんはもう雲の上の存在でした。中澤さんが本堂の仕事をすることになって、日本堂を祖師堂として残すということで、調査に来たのが最初です。その後、本堂設計の図面引きを手伝いました。

Q 本堂は、最初はコンクリートのドーム型を考えたそうですね？

中澤 「本堂は木造がいい」という檀徒さんが多く、コンクリートは経費もかかるので、ドーム型は賛同を得られませんでした。いったん建替えをあきらめたのですが、2年後にまた依頼があり、今度は私が設計して茶谷先生は監修という形で仕事をしました。日本堂は一七六四年の建立です。二百年以上の時間の一部を再生させたいと思って、内陣部分を祖師堂に転用しました。客殿の時と同じ考え方はです。そして今度は集成材の大断面工法を提案して、賛成を得ました。

松本 そう言えばあの時飯島さんは、途中で垂木の間隔を全部変えることになったって言って、泣きながら図面を引き直してたよね。

飯島 よく覚えてるねえ。本堂に泣いたりはないけど、あの頃はまだ手作業の時代で、一度線を引くと跡が残って、それを消すのが大変で。でも「ここ変えなきゃダメだよな」って中澤さんに言われて、自分でもそうだなと思うし。10年間同じ事務所で働く中で、中澤さんに図面で手間を惜しんじやいけないということを押さ込まれました。

Q 妙光寺での仕事は、専門家の立場からみていかがですか？

松本 角田山の背景がいいですね。山からの水に悩まされてきたけれど、水路を作って解決しました。山に囲まれていると安心感があります。

中澤 本堂前の院庭は、中国の伝統的な家の形——四合院のイメージがあります。四方を囲むように立てた家で、中庭のことを院子というのですが、それが院庭です。そして中庭の空の

Q 安穩廟は、古墳のような形をしていますね？

松本 あれは、墳墓の形ですね。野沢先生はともてもスケッチが上手な方でした。最初に野沢先生のスケッチがあつたんです。

中澤 杜の安穩をつくる時、最初はマス目に区切った平たい芝生だけの墓にすることも考えたんです。でもやはり何か象徴になるものがほしいということで、八角形のものにしました。

そしてそれをマス目の中央に置かず少し端に置いて、アキアキの樹を植えました。

Q 今後の境内は、どうなるのですか？

松本 参道の植栽は、地元業者の緑遊工房さんやお寺の松本さんも交えて、話し合いました。テーマは四季折々です。植物が楽しめる森になります。

中澤 そして「檀徒さんの安穩廟」をこれから設計します。檀徒さんの中にも後継のいない方があるということで、今までのお墓を引き継ぐ形の安穩廟を、数年前から依頼されています。従来の墓石の上の部分を残しつつ、新しいものを作るデザインです。これは飯島さんが設計します。

飯島 中澤さんと一緒にやるんですよ。妙光寺は、客殿も本堂も革新的でありながら、伝統的な部分もはずさずにつけてきました。同じように、従来のお墓を引き継ぎつつ、新しいものを考えます。妙光寺は、革新と伝統のどちらにも偏りません。両方あるところが、すごいんです。そんな妙光寺にふさわしいものになるように、今から頑張ります。

妙光寺に、また一つ生まれる新しい伝統が、楽しみです。どうもありがとうございます。

(聞いた人 編集部・新倉理恵子)

中澤敏彰さん

69歳・埼玉県朝霞市  
中澤敏彰建築設計室代表

昭和54年、東京工業大学茶谷研究室の助手として客殿の設計施工に関わり、以後本堂、祖師堂、京住院を設計。安穩会員でもある。



松本恵樹さん

52歳・埼玉県新座市  
春秋設計工房代表

第一次安穩廟ができた直後の平成2年に野沢先生の事務所に入る。以後境内づくりに関わり、今は参道植栽を設計している。



飯島 聡さん

48歳・千葉県船橋市  
飯島さとし建築設計室代表

中澤さんと設計事務所です。10年間ともに働き、中澤さんに私淑してきた。現在計画中の「檀徒の安穩廟」に取り組み。



## 『渡辺隆次展』 10月10日(木)～11月4日(月)

自然の草花やきのこの絵、甲州武田神社の天井画などで知られる渡辺隆次さんの作品展が、客殿大広間で開かれました。独特の技法で描かれた作品は、妙光寺の雰囲気にもぴったり！ 正味20日間の期間中、約600人の来場者でにぎわいました。(主催/NPO法人新潟絵屋)



屏風、絵巻ほか大小約20点の作品を展示。(写真撮影/村井勇)

## 秋の一日研修 11月16日(土)

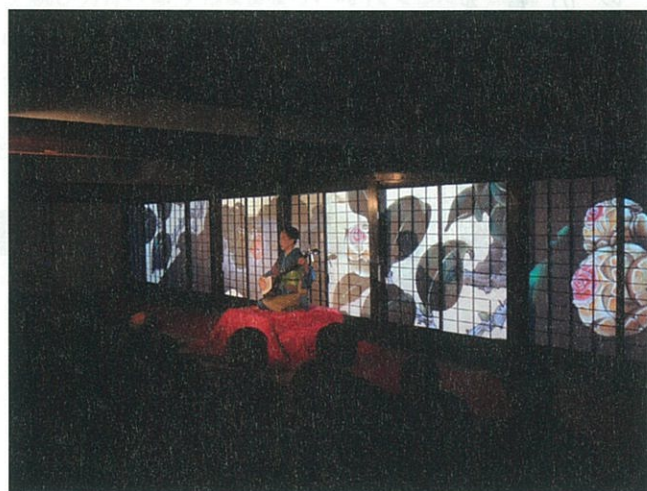


受講者20名でお経の練習、お参りの作法などを学びました。急きょ特別講師として、立正大学、慶応大学等で教える宗教学者・正木晃先生の「わかりやすい『法華経』入門」の講義がありました。



(写真撮影/村井勇)

## 『ASYL～アジール』上演 10月19日(土)～10月20日(日)



(写真撮影/水野立子)

大広間の障子17枚に映し出される映像に三味線と江戸唄、コンテンポラリーダンスが融合。妙光寺が幻想の世界に…。

こちらも2日間で140人と満席でした。

(主催/NPO法人新潟絵屋)

作・演出・映像=飯名尚人 振付・ダンス=寺田みさこ  
三味線・唄=西松布詠

# 寺のうごき秋

## 茶室で一服

10月の『渡辺隆次展』にあわせた日曜祭日に、気楽なお茶席を設けました。作法などは気にせずにと、多くの方がお茶を楽しみました。



普段は解放されていない妙光寺のお茶室。



お茶をたてて下さるのはボランティアの檀信徒さんたち。床の間には渡辺さんから記念に寄贈された絵が。

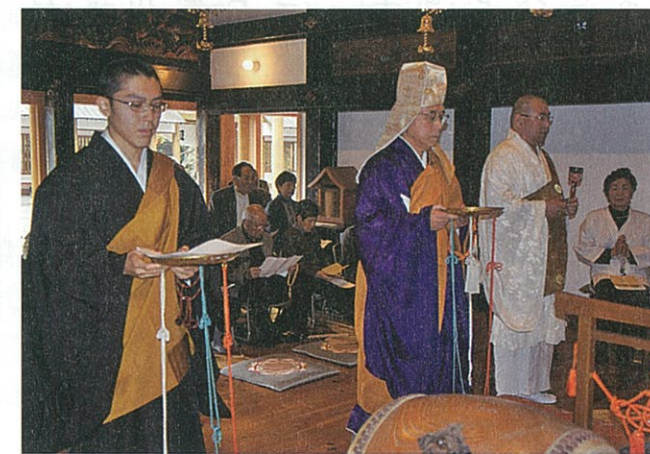
## 丹精こめで…

今年も客殿玄関に見事な菊花を、河村一良さん、内藤清さんが展示。参拝者や、個展の見学者が感心して眺めていました。



## お会式と法号授与式 10月27日(日)

日蓮聖人のご命日の法要を「お会式」と呼びます。今年第732遠忌でした。生前戒名を頂く「第12回法号授与式」と、「特別講演会」も合わせて行われました。



今年は16名が、小川住職より法号を頂きました。



特別講演会は、妙光寺で絵画展を開催中の画家・渡辺隆次さんと住職の対談。



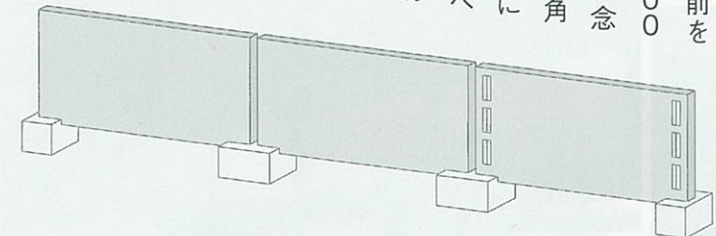


### 参道整備来春着工へ

#### 記念碑案

開創700年の記念事業として、参道両脇の植栽整備を計画し、皆様にご協力をお願いしてきました。お陰様で予算額500万円のところ、11月20日現在で6731,200円の淨財をお寄せ戴きました。心から感謝申し上げます。

そこで、一口以上のご協力者のお名前を刻んだ「開創700年・参道整備記念碑」を参道の一角に設置することにしました。後世への記録とするための小規模なものです。お名前の確認を別紙にてお願いします。  
植栽工事は来年春3月から4月に、天候を考慮して実施し



ます。周辺の松枯れがひどくて海からの風が強いので、植えられる木の種類が限定されます。その中でいかに美観を整えるかを考えて、設計を進めています。どうぞお楽しみに。

### 終活ノート途中経過

自分の最期を準備する「終活」が、社会で大きな関心を呼んでいます。この秋には住職に各地の公民館から講演依頼が3回あり、さらに来年の予約まで入っています。

8月の「送り盆」での大編集会議をもとにした、「妙光寺版終活ノート」は順調に編集が進行中です。市販のものとは一味違う、妙光寺の檀信徒が身近に使える内容を目指しています。3月にはお届けできる予定です。

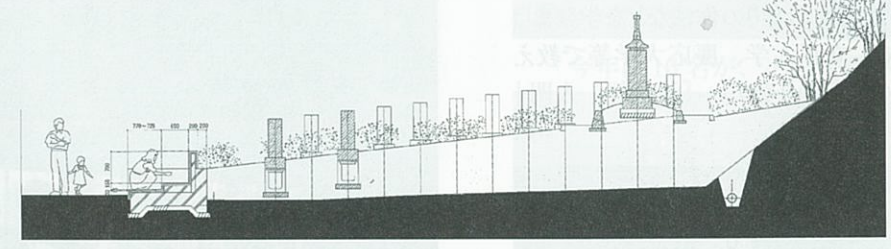


### 檀徒の安穩廟

#### 設計素案

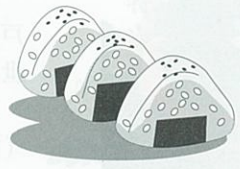
家の墓をお持ちの従来、の檀徒から、墓の後継者がいないという相談が増えています。

なかでも「安穩廟に移るために、親や先祖が建てた墓を処分するのは忍びない」との声が多く、これまでの墓石を残して活かせる形の檀徒の安穩廟を検討中です。  
図面の原案を役員会議で相談し、引き続き設計者が修正案の作業を進め、来年度中の着工を目指しています。詳細は改めてご案内します。



### 「秋奉加」お礼

農家の方を中心に、今年の秋の収穫米を仏様に奉納いただく「秋奉加」が届いています。正月過ぎまですべて祖師堂にお供えして、来年の行事参加の方々に召し上がっていただきます。お礼申し上げます。



## 誌上法話 小川英爾

### 激しさと優しさ

『日蓮は明日佐渡の国へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢のうちのありさま、思いやられていたわしくこそ候らえ』 日蓮聖人のお手紙

### 牢獄の弟子に

一日蓮は明日、鎌倉から佐渡の国へ旅立ちます。今夜の寒さを感じずにつけても、あなたが捕えられている牢屋の中のことが想像されて心が痛みます。一幕府に捕えられて土の牢屋に入れられた弟子の人たちに宛てた、日蓮聖人からのお手紙の書き出しです。

『法華経』を弘めることに生涯をかけた日蓮聖人は鎌倉幕府の反感を買い、龍の口（現在の神奈川県江の島海岸の近く）の処刑場で首をはねられるところでした。しかし刀が折れて首切りはまぬがれ、佐渡島への流刑に変更されたのです。そのとき弟子5人も同様に捕えられて、鎌倉の崖を掘った土の牢屋に閉じ込められていました。季節は現在の11月。当時の気候は今の時代よりずっと寒かったようです。

実はこの10月、毎月第1日曜に集まる信行会の有志で、佐渡島のお寺参拝の旅を予定していました。ところが台風の到来で前々日に中止を決定。予報通り当日は暴風雨で、佐渡汽船は終日全便欠航でした。冬には時々あることです。離島の生活の不自由さを改めて思いました。現代でさえこうなのですから、730年前の日蓮聖人の時代、11月に流刑地佐渡島に向かう不安はいかばかりだったでしょう。

しかも首切りをまぬがれた上で、再び生きて帰ることはできないとされる流刑地へ向かうのです。

### 過酷な中で

こうした過酷な事態の中で、文字通り明日出発という前夜、護送された相模の国、依智（現在の神奈川県厚木市）から弟子の身を心配したお

手紙を出されたのです。さらに続く文章で、日蓮聖人に師事し『法華経』に身を挺して修行する弟子たちの尊さを讃えています。

この手紙を受け取った5人の弟子は、日蓮聖人の深い愛情と信頼に涙したことでしょう。

この5人のなかに、一番の弟子と言われた日朗上人もいました。日朗上人は土牢から釈放された後、2年半に及んだ流刑中の日蓮聖人を8回訪ね、うち4回は角田浜にも足を運ばれたと伝えられています。

### 日蓮聖人のイメージ

一般に日蓮聖人は、他の宗派を攻撃した気性の激しい人という印象を持たれています。当時の鎌倉は武家社会で、暴力による支配が人々の心を不安にし、さらに疫病の流行、大地震や飢饉が続き明日の命すらまならい時代でした。庶民の平均寿命は24歳だったという最近の研究もあります。このように混乱した時代の中で、信念を持ってお釈迦様の真実の教えを弘め、社会の安寧を願ったのが日蓮聖人でした。激しい気性という印象を与えるのも無理からぬことかもしれません。しかしこれは後世に作られたイメージに過ぎないとの説もあります。

数多く遺っている日蓮聖人のお手紙は、迫害を受けた弟子を気遣う優しさや、家族を亡くした信者をいたわる愛情に溢れた文面で、その心配りの細やかさが強く伝わるものが多いのです。その代表的なものが、自身も生きて戻れそうにない佐渡島流刑の前夜、弟子の身を案ずるこのお手紙とされています。現代社会の指導者と言われる人や、自分自身に当てはめて考えてみたとき、どのように思われることでしょう。



# 「一人も大好き！」

「今度生まれ変わったら、あなたが女で私が男になるからまた結婚しようね!」と、ウフフ! つい最近聞いたお話です。なんともほほえまして、こんな奥さんに恵まれた人は幸せだなと思いました。

私自身、元来ひとりで何かをするのが好きだし、一匹オオカミで風来坊のような性格が強くて、結婚という制度というか、縛りに向いていないと思うので、きっと来世は結婚しないだろうと思ったりします。ところが30年も今の生活が続けて来られたのは、ひとえに我慢強い住職と自分の責任感の賜物でしょう。

この秋もたくさんの方々とお会いし、色々なお話を聞いて、心の栄養をいただきました。本当にありがたいことです。ひとりが好きといっても好奇心のかたまりでもあるので、新しいことや珍しいことを知ることは無上の喜びです。嘘やごまかしがあふれるこの頃だからこそ、自分の目で見、自分の耳で聞くという経験は宝!と思っています。

少し前にテレビで、はかとも(墓友)が流行しているという話題が取り上げられていました。ところが最近、それがうとうしいという人々もまた増えているそうなのです。それはあたりまえだろうと思います。そもそも、はやりすたりがあるから流行

でしょう。そういうことに一喜一憂せずに進んでいくのがお寺というものだと思うのです。(少し偉そうに言ってしまっごめんなさい)

ひとりが好きな人、友人とにぎやかに過ごすのが好きな人、いろいろな考えの人が好きなときに集まれる場所。たとえば地位や名誉とか、社会的なことなど一んにも関係なく集えるのが寺。そんな場所でありたいと思います。なんたってすべてを超えたときの最後のすみかですから。

寺の運営に関しては決定権の無い私ですが、「こうなったらいいな」という夢はあります。

この秋にその夢が現実となりました。茶室の活用が、有志の方々によって始まったのです。喜ばしいことです。ご寄附いただいたお茶道具の目録作りまでしていただき、開創七百年のすばらしい締めくくりとなりました。

さて最近の私は忙しいけれども結構心穏やかに、健康に過ごしております。韓国ドラマは卒業して、アメリカドラマに入門しました。(笑)そして時々ひとり映画、ひとりランチなどで静けさを満喫しています。これからやっていきたいことも計画しましたが、もう書ききれないので次回に!

寒くなります。体を冷やさないように暖かくして暮らしましょうね!



## 質問

700年前に妙光寺を開いたという「日印上人」とはどんな方ですか。



### 越後の生まれ

日印上人は文永元年(1264)生まれの記録がありますが、生まれた場所は三条、寺泊、弥彦と諸説あつて不明です。幼いころから聡明で学業の誉れ高く、8歳で石瀬(現在の弥彦と岩室の中間の集落)の天台宗青龍寺(現在真言宗)に入り、仏教を学びました。

このころ、佐渡に流刑中の日蓮聖人を訪ねた弟子の日朗上人が青龍寺に泊まりました。その夜不思議な夢を見て目を覚ますと、利発そうな子供、当時の日印上人が足元に控えていたという伝承があります。日朗上人は日蓮聖人が三題目を遺された角田浜にも4回立ち寄られたと伝わります。

### 日朗上人の弟子に

成長した日印上人は、各宗派の教えを学ぼうと比叡山始め京に学び、帰路鎌倉で日朗上人が『摩訶止観』第二(中



像 だったと伝えられています。

### 郷里で布教

国で天台宗を開いた天台大師の教えを講義するの聞き、改宗して弟子入りしました。以来、摩訶一院日印と名乗ったのは、この縁によるといいます。

別の説では、8歳の日印上人が寺泊で佐渡向かう日蓮聖人に出会い、名前をいただいたともいいます。

文保2年、鎌倉幕府の命による他宗との論争を、高齢の日朗上人に代わり日印上人が行い、ことごとく勝ちました。以来鎌倉での布教を許可され、日印上人が一番の弟子と認められたという逸話『鎌倉殿中間答』が知られています。この時携えておられたのが、現在妙光寺で祀りする、日蓮聖人

鎌倉で活躍された日印上人は、布教のため郷里越後に戻ります。お経を乗せた牛が止まって動かなくなり、ここに一寺を建立しました。近くに青い蓮の華が咲いていたことから、青蓮華院と名付け、後に本成寺と改めたのが節分の鬼踊りでも知られる三条市の本成寺です。

さらに角田浜が日蓮聖人と師匠日朗上人ゆかりの地であることからここに妙光寺を開き、その他各地に寺を開かれました。そして嘉暦2年(1327)65歳で、現在の新潟市津の妙蓮寺で亡くなり、墓も同寺にあります。

日朗上人は、六老僧第一、日蓮聖人の高弟6人中1番とされています。日印上人は、師日朗上人の優れた弟子9人中の1番の意味で、朗門九鳳第一と言われています。